

其の一 青木今朝夫氏（当時の職員）

-----だれも知らんだろう。学校建築について。こんな話があるんだ。話というより、当時の木祖国民学校の校長山田清先生の学校教育に対する熱意を-----と言って、当時同じ国民学校の高等科に勤務されていた青木今朝夫氏のお話の概要は、（千村記）

昭和16年といえば、日本国は戦争遂行のため総べてが「撃ちて止まむ。」一色の時代であった。物資もだんだんと少なくなり、何事につけても「ほしがりません、勝つまでは。」というわけで、神社・寺院の大木までお国の為として供出されていた。こんな時に、木祖村立木祖国民学校は藪原の大洞地籍（現の藪原公民館）にあり、国民小学校、国民高等小学校、それに青年学校が同居しており、各学年3学級で、小学校だけでも17学級（この当時は生めよ産せよ国策の影響で児童・生徒は多かった。）これに高等小学校（高等科）、青年学校と合わせると20数学級であった。どうしても手狭で、児童・生徒の満足する学習環境でなく、設備も不足しておった。当時最も盛んな訓練・教練などにいたっては行進すら満足にできず、この体力増強の時代に、また、飛んだり、跳ねたりすることの一番好きな子どもたちを、狭い校庭で我慢してもらわなければならなかった。

当時の校長山田清先生（豊科出身で、吾妻村蘭学校から栄転された）がこんな状態を何とか改善しなければならないと、午後になると藪原地域を検分して歩いた。どこかに大きな校庭と大きな体育館、これに立派な校舎の建てられる場所はないかと思案し探し求めて歩いた。

ちょうどその頃の国道（旧道）から極楽寺を上がって、八幡様の跡をだらだら登った傾斜地で東の方を望むと葛沢から、こちらに向けて、山の裾野がリング畑になっている。「よしこの場所だ。町から少し離れているが校地としては広い、それに西に向って平坦で西日も当り、空気もよい、天も広いこんな場所で、思う存分勉強をやれたら。」家に帰って早速、和紙に筆を執って、校舎の平面図を書き、本校舎二階建て12教室、附属校舎2棟（これは作業場として）を書き数日後、当時の学務委員であった山口春雄氏に相談する。

相談するというより、当の山田校長は、決断と実行の早い方で、教育者の立場から「大事な子ども（赤子）を預かって、いさお国の為にお役に立つ時、ひ弱な子であったらどうする。教育は十分な環境を整えなければ、子弟の教育はできない。我々教師は、狭い日本を考えず、広い大東亜、もっと広い大世界を考えなければならない。」と言って、学務委員を説得し、村会を聞き、早く村民の賛同を得て、一日も早く建築作業に入るべきだと熱弁をふるった。

過日東洵教育委員長さんに、この原稿を読んでいただいた。その時「そうであった。私も青年学校の訓導として、昭和15年には山田校長と共に、ポールを持って現在の中学校の敷地を測量した。」とのこと。また、この山田校長は熱情家であり、私が青年学校を辞して満州開拓に行く折、「君が帰ったら、新校舎で、教鞭をとってもらおう。生きて帰ってくれ。」と激励されたとのこと。

この熱意が学務委員から村長へと伝達され、村会を開き（現在なら公聴会）、校長の意見を参考にしようとした。ところが、当の校長は、図面を持って、「この時局急な時に子どもの体位向上なくして、お国のお役にたてるか、教育は心身の鍛錬であり、心は環境によって育つ。」と威風堂々として、とうとうと述べ、村議会議員一向を感嘆させるに至った。山田校長の情熱と、村民の教育に対する理解があわさって、校舎建築という大事業が着手されていった。



校舎建築の頃（昭和17年）

其二 齊藤今朝次氏(当時の棟梁)

木祖中学校の30周年にあたり、直接現校舎の建築に当たった、棟梁齊藤今朝次氏に当時の苦勞話をお聞きした。(千村記)

問い 校舎建築についてのおこりは

以前は今の藪原公民館のところに学校があったわけだが、小学校・高等科・青年学校と同居しており、先ずは手狭になったこと。それと校舎の一部が危険状態になった。当時の村長青木巖氏が県から一部使用禁止の勧告をうけていた。しかし、大工の専門家から見れば、土台は花崗岩の切り石を使っていて頑丈のように思えた。

問い 建築になるまでのいきさつは

学校が手狭になったこと。老廃化が目立ってきたことによって、昭和14年頃から現在の場所の測量が始まっていた。当分の校長山田清先生が新校舎建築について非常な熱意をもっておられたようだ。私に建築の指名があったことは・・・・・・
現在の木曾福島教育会館が昭和12年5月に建築の仕事にとりかかり(同年7月日支事変)この年の12月に落成した。この時に主任棟梁としてやったこと、それに昭和14年平沢と奈良井が合併し、猶川国民学校が河川敷に建築された。この時の棟梁が古畑さんという人で、途中病気でやめその後私が、後半棟梁として完成したこともあったと思う。また当分建築士の資格をもっていたのは私1人であったから。

同民学校建築の入札があり、松本の建築業者が最低で18万円で札を入れた。しかし、それだけの金がなく、総工費一切を含めて15万4千円で、村長から「君が引き受けてくれ。」と懇願された。

問い 校舎の設計とか木材の調達はどうであったか

設計は、県の建築課の技師の池田又次郎氏で、この人は、木曾教育会館とか、檜川国民学校とか、当時学校連築ブームで田立の学校も建築が始まっており、これらの総べてを設計した人で、私も懇意にしておった。木材は、この池田さんの世話により、更埴の木材会社から運んだもので、汽車で藪原駅におろした。駅からは馬車で運んだ。この当時は、日支事変が始まり物資が不足してきていたが、軍需とか、軍関係ということならば、いくらでもあった。しかし、一般とか、公共の学校の建築となると思うようになく、特にセメント、金具類は予定したように手に入らなかった。それに入札時より物価がだんだん上昇し、普通ならば村会で更正予算を組むわけであったが、こんな非常時でもあり、追加予算もなかった。

一番困ったことは、セメントがわからで、坪数ギリギリで1枚の余分もなく、1枚でもわったら大変なことだった。金具類、セメントなどは余分は全部軍へ献上ということであった。

問い 材料はどんなものを使用したか

だいたい杉材で、それに松と外材の米松も含まれていた。杉材は節なしの良いもので、二階建ての通し柱は28尺(約8米40種)巾が7寸5分(約22種と14種)で戸入れまで1本木でとった。二階の梁は日本松材で各教室4本使って、8寸~5尺のものである。上げるのに非常に重く、3人でテコを利用してやったが、苦勞したものだ。窓台は総べて杉を使った。腰カサギ(壁板)は松、床はブナの木で溝を掘りカンナで削った。天井はテックス(木材を主原料として圧延方式による加工材)である。724坪という大きな建物で、昇降口(現在の金工室)と宿直・公仕室を建った。これらの木材総べて墨つけを1人でやった。

問い お寺の建築と学校建築が重って、人手が不足したと聞きましたが

私の他に常時2人の若い衆がいた。これは永瀬茂雄君と永瀬繁晴君であり、私の弟子であった。建設途中に応召にあい、兵隊にとられてしまって、仕事もあるし、お国の為でもあり全く思うようにならなかった。日義村の大工さんが2人、時々手伝ってくれてワクは全部やったと思う。それに菅の歳をとったもと大工さんも雇った。

お寺は、萱屋を改良してカワラ屋根にする工事で、その他付属物も建てたようだが、私は、次代を担う青少年の教育の場を作ることが大切であり、お寺の方はその後でもよいと思った。しかし、当時は、極楽寺の改修の方に意義をみつけた人が多いようだった。

た。それと、食糧不足の折であり、学校建築には、お茶も出ず大工たちが交替で湯をわかすという状態に比べ、お寺の方は供物も多く、腹のたしにはなった。また、当時某有力者が学校建築と対抗してお寺を盛りあげたことも事実である。

問い そのような苦労の中で、うれしかったことは

翼賛壮年団(現在のPTAかな)の人達が藪原の駅から木材を運搬してくれた。協力というか、無報酬でやってくれている。また、当時の高等科の生徒が藪原の製材所から、タル木を担いで運んでくれたこともあった。

問い その他当時を思い出して、何か印象に残ることは

(しばらく瞑目の後)

人足はないし、寒い、西風の吹く薄暮の頃に東の山の峯に 出る白い月に 向って祈ったことがあった。尼子城の武人、山中鹿之助が月に向って「憂きことのなほこの上に積れかし、限りある身の力ためさん。」ちょうど、こんな心境であった。1月の大雪の降った時、1人この学校へと道もないところを登って来た時は、自分があわれでならなかった。

仕事を始めるに校庭に小屋掛けをするが、その屋根に敷く、桧の皮がなく、松本まで行って求めたがなく、帰り平沢の駅で窓から外を見ると駅の上で桧を切っていた。下車して売ってくれるよう頼んで、その場で買い、後日荷馬車で運んでもらったが、丸くかたまっていて、屋根に敷けず、学校の裏の葛沢に貯水池を作って、水に漬けやっとな作業場の屋根を作ったこともあった。

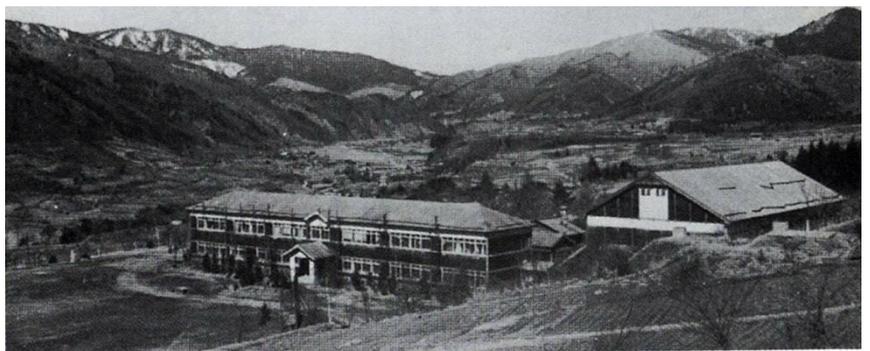
其の三 吉田長久氏(新校舎建設当時の教育長)

木祖中学校校舎の新築工事が終わり、昭和55年の2月20日に落成式を行ってから、今年で満18年を数えます。私は当時、中学校の体育館、引き続いて行われた校舎建築事業、その後の小学校建設にも直接携わってきました。

もともと校舎建設は、児童生徒が増え過密になって学校を分離するとか、逆に減少して統合するなど、通学区が変わる場合は難しいことも沢山ありますが、老朽化して現在地において全面改築をするということは、村として改築時期が来れば何をおいてもまずやらなければなりません。しかし、こうした人口規模の村で1つの学校を建て直す事は、容易なことではありませんでした。

この校舎が完成した時の小冊子に、当時の日野村長は次のように記しています。「当時に想起する時、私は議会及び教育委員会に対し、子供のために親は喜んでポロをまとうべきであると申しましたところ、満場一致の賛意を表され、一入決意を新たにされた次第であります」と。これは、村で行う他の事業や予算は少々我慢してでも、村をあげて中学校の新築工事にとりかかりましょうという事です。

前の校舎が戦後のベビーブームと新しい教育課程の中で、手狭となっしまい、昭和30年代の初め頃から、校舎増築の要望が学校から強く出されていました。当時の校長の森田寛雄先生は、特別教室が不足していることから、音楽教育を充実するため、音楽堂の建設と、木工室と金工室を分離して金工室を新築するよう強く要請されました。考えて見れば、戦時中の校舎で特別教室は全く不十分だったのです。村ではそうした要望を取り入れ総合的に検討した結果、



新校舎建築の頃（昭和35年）

図書室・家庭科室・音楽室などを中心とした木造二階建ての特別教室1棟を、昭和36年に建築しました。今の東側にある鉄筋コンクリートの特別教室棟とはほぼ同じ程度の建物でした。

村ではその頃、小学校は藪原にある本校と、小木曾分校、菅分校がありました。菅分校は昭和40年4月に本校に統合。小木曾分校は当時県下で一番規模が大きく(閉校時6学級143名の児童が在籍)、昭和48年4月から統合され、木祖村も1村1校制が実現しました。この分校統合により、木祖村における学校建設事業は大きく進むことになりました。

村では、昭和52年に中学校体育館の建設をしましたが、それより5年前から中学校の全面改築を視野に入れ準備を始めました。しかし、校舎建設にあたって、乗り越えるべき点が7つありました。

第1は、工事中、学校教育に大きな支障をきたすことはないか、どうかです。建設中の授業については、廊下一杯に図書棚を並べ、全校生徒で図書の移動をしたり、仮設の昇降口を使ったり、生徒の皆さんに大変不便をかけました。建設がほぼ終わる頃、当時の教頭の今井弘幸先生は「校舎建設という大きな仕事の中で、学校の教育計画を一つも変えることなく進められたことは、大変ありがたかった。」と言ってくれました。これは、事前の準備や村と学校との打ち合わせがよくできていたためと思いますが、生徒の皆さんが工事現場へは絶対立ち入らないという約束をきちんと守ってくれたことも大きいと思います。私の印象に強く残っているのは、明日にも取り崩しになる校舎を、生徒の皆さんが黙々と拭き掃除をしてくれた姿でした。

第2は、前の古い校舎が改築のための、危険建物として国の許可基準に達しているかどうかです。これは制度上のことですから、詳しく述べませんが、校舎建て替えの時期を決めるにはとても重要なことです。昭和36年に建てた特別教室棟の取り壊しは、最後まで課題となりましたが、何かと国や県の許可を得ることができました。

次に第3として、校舎を建てる敷地面積ですが、幸い村の先輩の人達が広い校地を確保してくれてありましたので、当初はその校地内での建て替えを考えていました。しかし、体育館にしても、校舎にしても今あるものを使用しながらプレハブ校舎の仮設をしないで、改築ができるようにするため協議の結果、新たに体育館部分の敷地を購入しました。今体育館東側の法面を見ればわかりますが、かなりの斜面の土を切り取って現在のように平らにしたのです。そこへ、最初に体育館を建てました。従って古い体育館は、今の特別教室棟の所にありましたが、使用しながら新体育館を建てることができました。体育館を建てるため切り取った土を、校地の拡張に使うこととなり、校庭の西側が大きな法面になっていますが、その下の校庭と国道の間に先生方の住宅2棟4世帯分の住宅がありましたが、それを取り壊して埋め立てをしました。校庭の西側に南北にU字溝が入っていますが、それより西側(国道寄り)はその時埋め立てをして拡張した所です。校門を上ってくる北側もそうです。石段を登りきる所に大きな桜の木があります。また、昇降口の前にも桜や藤棚がありますが、そのまま残すように努力しました。

第4として、工事中の学校給食については、給食室は戦後、父母の皆さんが当番制で味噌汁給食をしてくれた、懐かしい給食室でしたが、新校舎の配置上残すことはできませんでした。小学校の給食室を拡張し、学校給食センターとして給食運搬車で運ぶことになり、現在に至っております。

第5として、建設資金の確保であります。校舎建設のために要した建設費は、体育館や校舎を合わせて6億1千万円余りで、国の補助金を受けたり、国からの借入金をこれに充てました。なお、この借入金の返済が終わるのは平成16年です。

第6として、国や県の補助枠に入れてもらうために、沢山の手続きが必要になりますが、何回も県庁や文部省へもお願いに行き、早期に認定を受ける事ができました。

第7に、村にふさわしい校舎の設計についてです。校舎を建設するために、村に中学校の校長先生や教頭先生、村議会議員、教育委員などから講成する校舎建設委員会を設置しました。また、設計者は、経験豊富で中山間寒冷地の工事に慣れている小原コンサルタンツに依頼しました。設計段階では、学校の先生方から例えば、理科準備室を広く取ること、図書館を明るい所にすること、さらに教室内のTVやOHPスクリーンの位置など細大もらさず提案してもらいました。一方、建設委員会は、県下各地の学校を

何校も規察して参考にしました。その中から幾つかのことが出てきましたが、その1つに教室の廊下の床を木に、暖房は各室暖房にということでした。

また、新角新築するので時代にあった何か新しいものを取り入れたいということから、①ランチルームを作る②L教室を設ける③イメージとして何かを描く④普通教室の面積を従来より少し広くする⑤体育館や校舎の建物は、国の基準を参考にするものの、出来る限り余裕をもった面積を確保すること⑥校舎全体の配置計画(教会の建物位置)を決めるに当たっては、昭和46年に校庭の南にプールを建設したこともあり、校庭を広めても狭めることはしな



い。陸上100Mの直線コースをとれるようにする等を基本に打ち出しました。③は、正面玄関からみた鳳の姿であり、「おおとり祭」の名はここから始まったと思います。

建設委員会の協議で最後まで議論したのは、ランチルームの柱をなくすことでした。しかし、設計事務所からは、構造上、荷重計算上無理とのことで断念しました。鉄筋コンクリート2階あるいは3階建ての校舎ですから、基礎工事がしっかりしていなければなりません。ボーリング調査の結果、基礎工事部分にコンクリートの電柱のような、長さ7Mと9Mの杭を何十本も打ち込みました。地盤の堅いところまで届くと後は入りません。この杭打ちの音は、村中に響き渡りました。大きな鉄の玉をクレーンのような機械でドーンドーンと打ち込むので、ものすごい音がしました。学校の授業中には授業の支障になるので、休みの日を選んで行いました。

校舎の建築というと、新しくできる建物のみが先に立ちますが、現在改築ですから、今までの校舎を取り壊さなければなりません。それは大変つらいことです。あれだけの大きな校舎を2日ほどで取り壊しが終わりました。取り壊しの終わった大量の古材は全部、校庭に深さ5～6Mの大きな穴を掘って焼却しました。午前10時頃までに古材を運び込み、夕方までに焼き尽くし、また翌日同じことをするのです。冬の校庭を使わない時でしたが、これも学校の休みの日に行いました。

村では、体育館を昭和52年度に建設した後、翌年には校舎の設計期間とし、54年・55年度に校舎建設を行う予定でしたが、幸い予定が早まり53年度の3学期の中頃から工事に着手し、54年12月に全て完成しました。新校舎には、全校生徒と父母の協力で冬休みも終わった1月11日に移転作業を行い、翌12日から3学期の授業が始まりました。55年2月20日、全校生徒210余名と村内外から大勢の来賓の方を招き、落成式が執り行われました。その年度の卒業生、3学級最後の学年89名は、3学期を新校舎で学び元気に巣立っていきました。

新校舎が完成してから、やがて20年の歳月がたとうとしています。生徒や多くの先輩の皆さんがこの校舎に深い愛情をもって大切に使われ、建設当時と少しも変わらぬ程、行き届いた清掃や施設管理がされている事を、大変嬉しく思います。

こうした施設設備の充実もさりながら、生徒の皆さんが校庭の花壇や、町中にきれいな花を咲かせ、地域の環境美化やお年寄りへの思いやり等、立派な活動を続けておられます。私は、中学校の教育がこうして、地域に根ざしているからこそ、村の歴史の継承や文化向上が図られていくものと思います。

どこの地に学び、働こうとも郷里を大切に、あの「野人の理想」の大きな石のように、大地に根を据えた逞しい人間になって貰いたい。そして親に心配をかけることがないよう、いつら若者らしく人生の意義（真理）を探求して、正しい道を歩んで頂きたいと思います。校舎は、いつまでも皆さんを見守ってしてくれる事でしょう。

其の四 日野文平氏(新校舎建設当時の村長) ～「野人の理想」の石について～

朝、建設課長の青木君が来て、「村長、大変だ。菅川橋の所に大きな石が出て、これを片付けるのに、金もかかるし、時間もかかる」ということだ。「よし、それでは、現地を見よう」と言って、早速現地へ行って見たが、昨日まで何もなかった川の真ん中にドッシリと出ている。早速まわりを見たが、なるほど大きな石だと思いながら、中学校へ持って行ってやろうかと考え、その足で校長先生の所へ行った。

私の小学校の時は、奉安殿の所にアカシアの大木があり、体操場の角に唐松の大きな木があって、何かという、思い出した記憶があり、今の中学の庭に持って行って、生徒諸君の頭の中の中学を思い出す材料にしようとしたのだ。

鈴木校長先生と教頭の沼田先生と三人でジープに乗り、現地へ行って見たが、両先生とも、何も言わないので、黙っておると、鈴木先生が、「運ぶのに、どうしますか?」と聞か



れたので、「日通の重量運搬にお願いすれば、何とかあります」と答えて、一応運ぶことにした。当時教育長の吉田君に、「金のことは、何とかするから、運んで来る手配をしてくれ。」と頼んだところ、「あれは、名物になるから、一生懸命やりましょう。」と言って、段々事が具体化してきたのだったが、何とも大きく5トンはあっただろう。

教育長から「明日は運び出す。」との報告を受け、喜んだところへ、須山君が来て、「村長、金ではやらないが、中学生のためならやりますよ。」と、言われたことを今も思い出す。

須山君も男だ、「やりますよ。」--この一言しか言わない。

ちょうどその日は、木曾福島に会議があつて、行くには行つたが、石のことのみ考えて会議は上の空で帰つて来たのが、三時頃であつた。

さて、トラックを動かしてみるが、鉄橋があつて通れない。しかたなく菅回りで学校まで来たのだった。

丁度、中学の工事中で、やっとのことで校庭に上がり、現在のところへ来て下ろしたのであるが、石の向きが難しい。鈴木先生の見目で、現在のように据えたのであつた。

据えてみて、名前が欲しくなつたが、募集などはやめて、考えてみようということになった。

校歌の一節に「野人の理想」という一節があり、これが良いだろうということで、命名したのである。

この石のように、どっしりとした人間になつてもらふべく、心をこめて持つて来た石であり、中学生の諸君の心の糧となることを折るものである。